特集・横浜と農業⑥

後継者はいないのか

矢沢定則

一――農業後継者問題とは
二――後継者問題の変化
三――後継者不足とは何か
四――農家はどう考えるか
五――後継者はこう考える
六――後継者問題は農業問題

一――農業後継者問題とは

〝農業後継者〟というと、これは恐らく全国的な傾向なのだろうが、必ずといっていいほど〝不足〟とか、〝深刻〟という言葉がつきまとう。連想ゲームに例えるなら、九九・九%ぐらいはそういう類いの回答が返ってくるに違いなく、今や農業後継者とは、さながら、満ち足りないものの代名詞でもあるかのように、不足という言葉と表裏一体を成しているようだ。

ともあれ、〝農業後継者不足〟は、現代の農業事情を語るに、欠かせない話題のひとつである。斜視眼的な見方をすれば、これは一種の流行の感すらあり、まさに、農業界挙げての〝農業後継者フィーバー〟が、農村を横行しているという具合になる。そして、その頂点に立つ農業後継者は、さながら英雄であり、スターであり、金の卵以上の貴重な存在としてもてはやされ、〝農業後継者ヤーイ!!〟という熱いラブコールは、単に当事者だけにとどまらず、農業界最大の関心事として熱い奔流を成し、農村を渦巻いている。

だが、これは決して大袈裟なことではなく、大袈裟という以上に深刻な問題である。現代農業が抱える問題があまたある中で、こと後継者問題に限っては、非常事態が生じているといい切ってよい。それほどに、後継者の涸渇状況は農業界に蔓延しているのである。

新しい労働力として、将来的に農業を背負って立つべき後継者がいない。これはとりも直さず農業の根幹を揺るがす問題であり、後継者不足の解消、即ち新しい農業担い手の確保育成は、農業界が総力を挙げて取り組まなければならない緊急課題といえる。

しかしながら、農業後継者問題ほど、とらえどころのない問題はない。それは例えばわれわれが、なぜ後継者がいないのか、また、どのようにすれば後継者が確保できるのか、といったごく常識的な問いかけをしてみた場合においても表われる。そこに挙げられる因子は、大小さまざまに極まりなく、しかも、いずれも決め手というものを欠いている。それらは政治的要因であったり、経済・社会的要因であったり、また個人的要因であったり、大きくいえば日本の産業構造における、また社会構造における全てのマイナス要素が凝縮されているといっても過言でない。びっしりと群生した因子の一つ一つが、複雑な形で絡み合い、破るだ

に困難な堅固な砦を造り上げているというのが、この問題の特質であり、換言すれば、極限のないというのが後継者問題の今日的な姿である。「後継者、後継者」と血まなこになればなるほど、悪循環は繰り返されるばかりなのである。

そして、さらに輪をかけて難しいのが、これらの解決方法である。一朝一夕に解決できる問題でないのはもちろん、方程式のように、公式に乗っとれば自然と解答が得られるというものでもない。原因の因子が複雑であるがゆえに、基本となるべきものを引き出すことすらできないのが現状で、残念ながら、極限のない悪循環を断ち切ることはおろか、悪循環の渦の中を右往左往、翻弄されているといったところが実態であろう。

再三繰り返すように後継者問題は、見るほどに触れるほどに根深い問題である。それはまた、歴史的にみても明らかである。即ち農業後継者問題は、何も今日に限った問題ではなく、今日の農業が抱える幾多の悲観的問題と同様に、歴史の中で醸造された代物なのである。本稿では特に後継者問題の歴史背景やら、その過程に触れないが、ともあれ、後継者不足という状況は数十年来の問題であり、その解決が叫ばれながら、一向に対策らしきものが見い出してきていないという事実――先人が、それを怠ったというのではなく、取り組みようがなかった――から推して、後継者問題の根の深さを認識して頂きたいと思うのである。そして、それだけに、農業後継者問題の解決は、待望久しいものなのである。

二――後継者問題の変化

後継者問題に、われわれはどのように取り組むべきか。農業後継者の不足は、農業の死活的問題であり、ともすれば農業壊滅の危機をも招きかねないことは、すでに述べた。また、それらが極めて悲観的事態に遭遇していることも事実である。

しかしながら、悲観的な要素ばかりに満たされているわけでは決してない。むしろ、これまでの凋落傾向に歯止めがかかりつつあるという現象が一方で観察されている。

例えば、筆者の勤務する横浜南農協管内の新規就農者数をみても、ここ数年の数を見る限り、実に倍増という結果になっている。中でもUターンによる新規就農はウナギ昇りなのである。

もちろん、これだけを例に取って、後継者問題が解決したとは思わないし、また将来的な展望に立ってみても、手放しで喜べる代物ではない。当農協の生産基盤から推しても、焼け石に水的な数字であることは否めないし、将来的な農業への定着ということを考え合わせれば、不安定的要素は従来とさほど変わりなく内在しているのである。

ただ、後継者問題に関して、流れが変わりつつあることは事実である。それは問題解決に向けての新たな跳躍台となることが、十分に期待できる要素を含んでいる。

あえてこの現象を農業再認識ということに置き変えてみよう。すると、それに至る要因は次のようになる。

① 高度経済成長期の終焉と共に、それまでとかく経済構造の中では異端的存在であった農業が見直されてきた。

② 世界的な食糧事情の悪化から、食糧生産という農業の基本的役割が再認識されてきた。

③ 社会の管理化が高度になるにつれ、自然に対する欲求が強くなった。

④ 高度経済成長下において農家自体が陶汰され、比較的経営の安定した農家が増えてきた。

⑤ 農業の機械化等が進み、農業に対する前近代的イメージが薄れた。

⑥ 農業後継者問題についての取り組みが図られ、農業団体や行政の実施している後継者育成事業が効果を挙げている。

⑦ 社会現象として、農業に対するマイナスイメージが払拭されてきている。

いささか飛躍した向きもあるが、以上のような要素が挙げられはしまいか。

農業そのものが社会的地位を高めていくならば、おのずと農業後継者問題解決の活路を開くひとつの効果にはなろう。その意味では、農業後継者問題がありとあらゆる機会に論じられねばならない。

ともあれ、流れが変わりつつあることは確実なようであり、〃新規就農者が増えた〃というひとつの事実が、ただ単なる自然現象ではないと思われるのである。また、自然現象としては、ならないと思うのである。

三――後継者不足とは何か

さて、このような中で、農業後継者問題はどのように論じられるべきであろうか。後継者不足とは一体何か、そして、農業後継者自身は一体何を考えているのか。本稿では、これから、これらのことについて述べていきたいと思う。

後継者問題が、とらえどころのない問題であることは既に述べた。またこれまでも、後継者不足ということを再三にわたって述べてきた。

では、後継者不足とは一体何を指していうのであろうか。それ以前に、後継者とは、何をもって後継者とするのであろ

うか。ここでは、まず、後継者の定義付けを行ってみたい。

〃後継者〃とは読んで字のごとく〃後継ぎ〃のことである。即ち農業の後継ぎということであるが、常識的に息子や娘、しかも多くの場合は、長男を指して後継者とするのが常である。これをひとまず原則的に置いておいて、後継者の範囲について考えてみたい。

現在、農業に就くという形態はさまざまだ。また単に農業といっても、趣味的範疇を越えない経営——家庭菜園や自家消費用の農産物だけを生産するようなもの——から、大中小の経営規模まで千差万別だが、就農とは少なくも、業として成立する生産行為を行うことであろう。ともかくも、就農の形態は、

① 学校（中学、高校、大学、研修等）を卒業して就農する。

② 他産業より転職し就農する。いわゆるUターン。

③ 他産業に勤務し、定年退職後に農業をはじめる。

④ 特殊なケースとして、相続の発生等で就農する。Uターンの変形。

以上のように大別できるが、③のようなケースにより就農した者については、たとえその親がいたとしても後継者とはいわないだろうし、また、④のようなケースにおいては、経営主が生存していなくとも後継者と呼ぶ場合も生じてくる。即ち後継者とは、確固たる経営を引き継ぐ者であり、かつ若い者というおぼろげな線が出てくる。年齢的に何歳以下というようにはっきりとした境目はないが、当農協あたりでは概ね三五歳前後という判断をしている。

さて、そこで後継者問題に転じてみると、後継者不足とは、この三五歳前後以下の新しい働き手がいない、ということになってくる。

では、不足とは何か、どこでどう不足しているのか。次に不足の実態を明らかにしてみたい。

★ "農業ついたきっかけは"という質問に対して、上記の様な答えが返ってきました。なかでも、いちばん多いのは、自分の意志で選んだという答えで、全体の60%が答えています。

次いで、多いのは、"家が農家だから何となく"という答えで、全体の35%を占めています。また、"親にすすめられて"と答えた者は意外に少く、わずか5%にすぎません。

ともあれ、農業を選んだということの裏では、やはり、何らかの形で、農業に魅力を感じているからではないでしょうか。

四――農家はどう考えるか

農業後継者不足の実態とは何か。これをまず、ひとつの現場の声に置き換えてみたい。

横浜市の南西部地区（港南、磯子、金沢、戸塚、瀬谷）においては、行政と農協が一体となった横浜南西部農業後継者育成協議会が昭和五十五年度以来組織され、また横浜南農協においては、これに先立ち昭和五十二年に横浜南農協農業後継者育成対策委員会が組織され、二者が一体となって管内における農業後継者の確保、育成対策活動に取り組んでいる。構成を若干補足すると、県普及所、市農政事務所、農協、農協青壮年部、婦人部、自主的後継者グループ、農家組合員（横浜市農業後継者育成指導員）と、各界の代表を網羅しているわけだが、これが中心となり、農業後継者問題の裾野を拡げようと、一昨年から、「就農予定者父母のつどい」を行い、あとつぎ問題についての討論を行っている。

これは、将来的に就農する見込みのある子弟（一六歳～三〇歳程度まで）を持つ親を集め、〝後継ぎ〟育成における悩みや問題について話し合おうという試みである。

筆者は、この話し合いの中から、後継ぎを育てる親たちの肉声として、各自の共通項であった幾つかの声を挙げてみた。

① 親のいうことを聞こうとせず、将来について話したくとも、機会が作れない。

② 息子が何を考えているのか解らない。

③ 将来のことを考えると、自信を持って子供に農業をやれといっていいのかどうか解らない。

④ 農業をやる者が少なく、仲間がいないということが気にかかる。

⑤ 嫁問題等に不安を持つ。

⑥ 農業をやる気はあるようだが、親の

★〝農業に就くことに不安はありましたか〟と、いう問いかけに、何と、全体の70%以上が不安であったと答えています。

では、どんなことを不安に思ったのでしょう。不安の原因を挙げてもらったら、上記の様な結果になりました。

やはり、収入不安が一番多かったのですが、意外にも多かったのが、都市化に対する不安や、税金に関連する不安でした。若者たちは若者なりに、農業を取り巻く社会情勢に、敏感に反応しているようです。

考えているものとは別のものを考えているようだ。

以上のようなものが、その主なものであるが、総じて感じ得ることは、まず極めて都市農業的特徴に裏付けられているということだ。恐らく、出席した父母のほとんどは、本市における急激な都市化を第一線で体験してきたに違いない。われわれは、事もなげに今日「都市農業」という言葉を常用している。しかし、都市農業とは何か。都市と農業、都市機能の中に農業が果たす役割といった論議は、今日の農業事情からすれば、やむを得ぬことかもしれない。しかし「都市農業」という言葉のひびきは、一方で農業は都市の隷属物であるとでもいうような、鉄面皮的印象をわれわれに与えるのである。即ち、これこそが農業にとっての都市化なのではなかろうか。

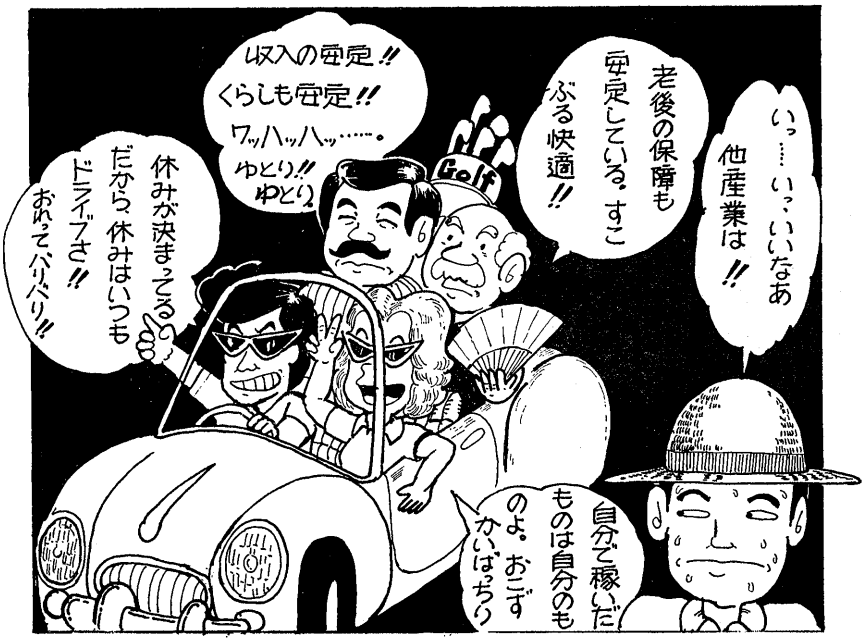
父母たちが幾度となく繰り返し見つめてきたものは何か。狭められていく農地であり、去って行く仲間であり、また、宅地並み課税といったような農業の追い出し、囲い込み政策であったに違いない。その中で培かわれてきたものは、〃果たして農業でやっていけるのか〃という一貫した不安ではなかったろうか。農業の先細り的状況の中で、次代のことを考えるなど、いかに愚かしいことかは察するべくもないが、今日はっきりしていることを、父母の言葉を借りていうのなら、農業後継者不足とは、人材の不足ではなく、後継ぎを、〃育てられない〃〃育てることができない〃また〃育たない〃ということなのではなかろうか。そしてそれは直接に、若い者たちの厭農風土を培うことに他ならなかったのではなかろうか。あたらずとも遠からぬ結論だと筆者はそう確信する。

五――後継者はこう考える

さて前項では、父母の側、いわゆる後継者を育てた側から問題を見つめてきた。それでは視点を一八〇度変え、後継

⑤ 行ってみたいはやまやまなれど

★他産業への魅力も、絶ちがたい？……。



★ 都市化が進んでいる地域ガラ、比較対象としての他産業が身近にあるだけに、他産業には相当の魅力を感じているようです。〃他産業に魅力を感じたか〃という問いかけに、全体の55%が、〃一度は経験してみたかった〃と答え、〃魅力を感じた〃。〃農業よりいいと思った〃という回答を合わせると、66%が、他産業に、強い関心を寄せています。

この、他産業志向は、農業に就いてからも、相当に根強く残っているものと思われます。そして、他産業が良いとする理由には、上記の様なことが挙げられました。これ等は、農業に備わってない面、即ち農業の弱点として、充分に検討してみる必要があるでしょう。

者自身の意見から農業後継者は育つのかという問題を考えてみよう。これについては、前に述べた農業後継者育成組織が実施した「農業青年の就農動向に関するアンケート調査」結果に任ねたい。このアンケートの対象は、一八歳から二五歳までの独身青年農業者（農業について五年未満の者）を中心に、戸塚4Hクラブ（旧戸塚区を中心に組織されている青年農業者組織）の協力をもとに実施したものである。農業が嫌われる理由、後継者を育てる方法等おのずと語られる、実に生々しい現場の声として、ご覧願いたいと思う（四三ページ～四九ページ①～⑧）。

六――後継者問題は農業問題

調査対象となった農業後継者は、昭和三十年代以降に生まれた全くの戦後世代である。戦後の民主教育における職業観は、職業選択の自由を旨としており、おのずと世襲的観念を持った農業と対立することになる。ここで教育論議をするつもりはないし、現代の教育が過ちだというつもりは毛頭ない。

しかし、この職業観を一貫して培ってきた世代にとっては、特に本市のように都市化が進んだ地区においては、比較対象としての他産業が身近なだけに、農業を見つめる目も、しんらつになってきはしまいか。その意味においてみると、農業の敬遠される理由は、他産業に対する魅力がひとつとなっている。

しかしながら、この比較は、農業後継者問題を解消するのに、ひとつの重要な問題を露呈している。それは、他産業並みの条件が充たされれば、農業も、まんざらすてたものじゃないということになる。つまりは、他産業に勤めていると同じような条件で、収入があり、労働時間があり、休日等が充たされれば良いということなのだ。

それは、若者たちが目指す農業経営の理想を尋ねた場合、一様に〝施設園芸〟と答える志向にも表われている。つまり

★ さて、それでは、実際に農業についてから、若者たちは、どの様な農業感を持っているのでしょう。

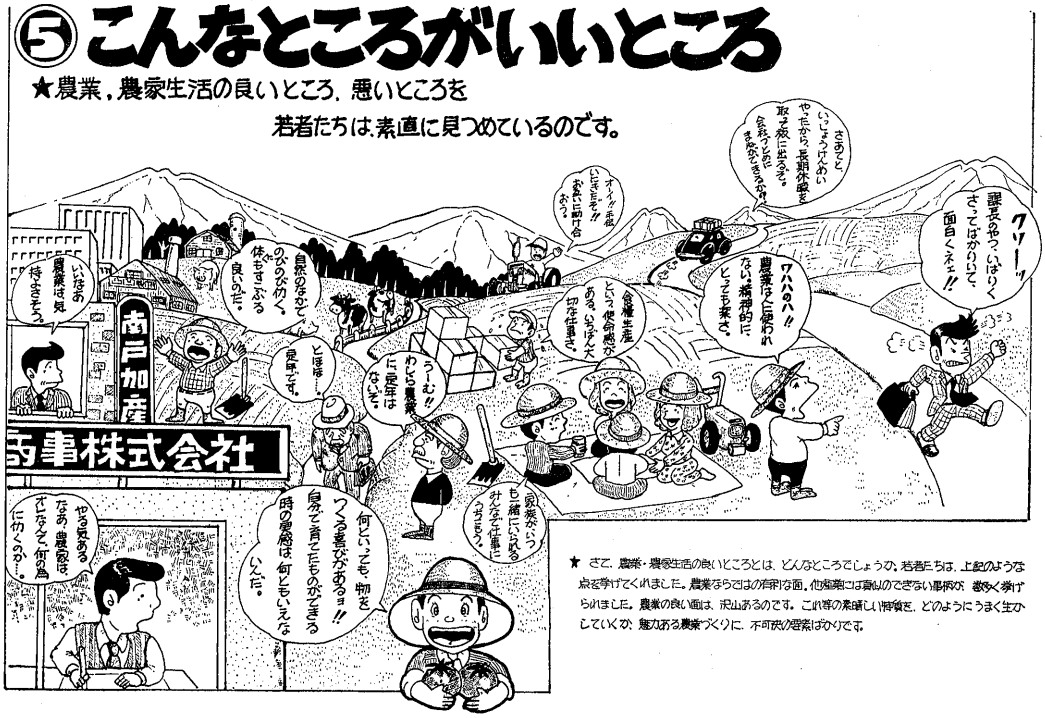
まず〝転業として農業は良い転業か〟と、いう問いに対しては、3人に1人の割合で、良いと思うと答え、良いとは思わない（全体の17％）という答えに勝りました。また、〝どんな気持で農業に取り組んでいるか〟との問いに対しては、積極的、意欲的に取り組んでいるという者が、全体の60％を占め、しかたなくやっているという者は、わずか5％でした。ただ、どちらとも、〝どちらともいえない〟という回答が多く、農業に対して、比較的不安定な立場を取っている者が多いようです。

しかしながら、〝今後も農業をつづけるか〟という問いに対しては、ほとんど全員が〝そのつもりである〟と、答え、転転をしたいとする者は、皆無でした。

若者のやる気を、どのように目覚めさせていくか。充分に考えていく必要がありそうです。

⑤ こんなところがいいところ

★農業，農家生活の良いところ，悪いところを
若者たちは，素直に見つめているのです。



★ さて，農業・農家生活の良いところとは，どんなところでしょうか。若者たちは，上記のような点を挙げてくれました。農業ならではの特徴的な面。他産業には真似のできない事柄が，数多く挙げられました。農業の良い面は，沢山あるのです。これ等の素晴しい特質を，どのようにうまく生かしていくか，魅力ある農業づくりに，不可欠の要素ばかりです。

⑥ こんなところが，ちょっと……

税務署
固定資産税
相続税……
さあ，さあ，ベッチリ払って下さい。
いろいろな税金で苦しめられる。農業収入は，不確定だからないのに!!
私もお休みョ
今日は，テニスでルンルン気分なの
今日は日曜だから，ゴルフだよ。
農家のくらは，大変だ。
来た休日がなく，世間のくらが休みでいても，何か，ムジュンを感じるなア。
農産物価格は，安くて不安定だ。何で，農家ばかりがいじめられるのだ。
都市化が進むと，仕事がしにくい。農業がつづけられるかな?
オラオラ，都市化が，どんどん進むぞ
不動産
今なら，お高く買いますよ。農業やめたら?
一山 100円
農業がいっも，楽だと，何かとうるさい，気を抜くこともない。
なんや……これ，あれ，これ
ありゃ，ここら……
ニーレっ……
いっも楽だなあ，こんな仕事をしていたら，楽もできないよ。
ウッツ〜!!
ヤグ〜!!
セシス悪〜い。キライ!!
ったら，仕事はおわりだよ。
朝早くから，夜遅くまで，おまけに休みはなし，これじゃ体がもたないよ!!
つかれたなあ〜〜〜。
何かと世間の目がうるさいのは，いやだなア。
古い習慣や，ならわしに，しばられるのはいやだ。

★ それでは，農業・農家生活の悪いところとは，どんなところでしょう。若者たちの挙げたものは，上記の様なことでした。一見して頷るとおり，これまで述べてきた，就農時の不安要因や，他産業に対する魅力といったことのほとんどが，悪い面として列挙されています。ここで挙げられたものは，大別して，農業を取り巻く情勢不安，労働条件の悪さ，農村社会構造に関する問題に区別できます。
これまでに述べてきた事と合わせ，今後の後継者対策を考える時に，非常に興味深い結果といえますが，これ等の問題のひとつひとつの解決が，農業の将来を考えた場合，どこも大切なことといえないでしょうか。地域社会，それぞれの農家，今こそ，これ等の問題を考える時ではないでしょうか。

施設では、天候にも左右されず、休日も適度に取れ、労働時間も一定し、収入も安定しているという期待がそこにある。経営内容、形態によって若者の要件が全てにわたって充たされるということにはならずとも、他産業をひとつの目標にすることが、決め手のひとつになるように思われる。

また、幾つかの成功例――後継者が意欲的に農業に取り組んでいる――をひも解いてみると、前述と似通ったことが具体的に挙げられる。先の就農予定者父母のつどいでの発言から主なものを挙げてみよう。

① 親子、家族の共同経営という形ですべてをあけっ広げにしている。それでなくては息子のやり甲斐もない（養鶏農家）

② 農業をはじめた時から全て給料制でやっており、ボーナスも出す。法人化して経営を行ってるが、息子も経営者の一人という意識をもって意欲的（養豚農家）

③ 農業をはじめるに当たって、息子の希望もあり施設を導入した。そっちの方は息子に任せるつもりだが、親と競争でどっちがすぐれてるかやってみようとやる気になっている（野菜農家）

④ 労働時間は、八時間を守るようにしてダラダラと仕事をしない。休みは順々に取るようにしている（野菜農家）

というようなものが列挙できる。そしてこの言葉を裏付けるように、父母の集いに出席した後継者の一人は、自らの心境を次のように語った。若者の気持を代弁するものとして挙げてみたい。

「農業をはじめて半年は、親と喧嘩ばかりしていた。それからすこしずつ興味も出て、やる気にもなってきたが、ちょうど二年目でハウスを建ててもらい、親は露地、自分は施設で、そのほうは全て任せてもらっている。最初は失敗の連続だったが、仲間に聞いたり、普及所に聞いたり、何とか人並みのものができるよ

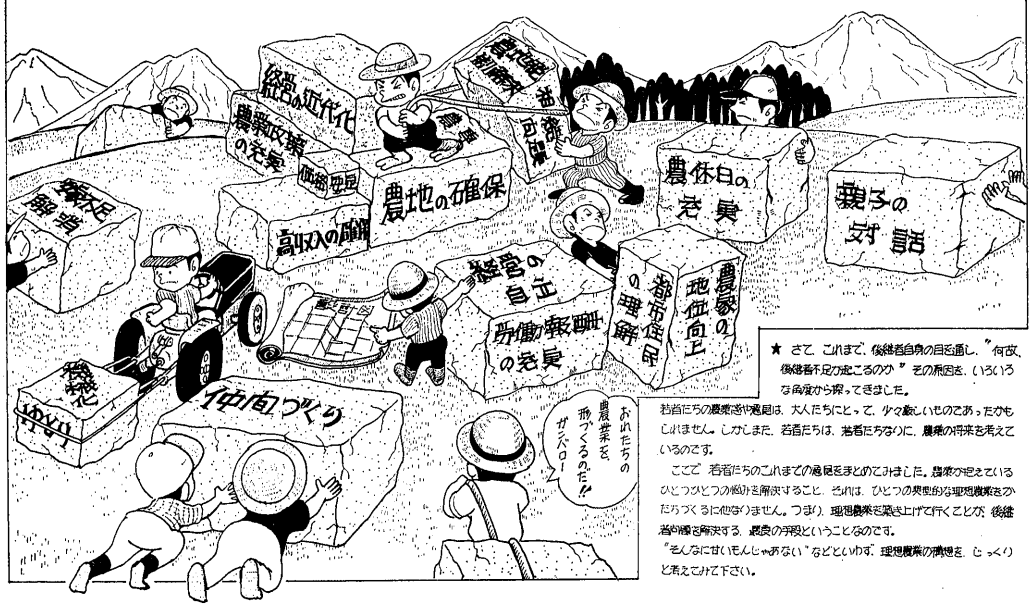
★ 農業後継者は、何故不足するのか？ 再三、再四にわたって、その理由を解きあかしてきましたが、後継者自身は、これまでの様々な理由の他に、上記のようなことを、つけ加えて上げています。

ここでは、農業の価値が、世間一般に理解されていないという、大きな問題が、うかび上ってきています。また、農業がバカにされている。仲間が少いといった、現在の風潮を象徴するような理由が目だちます。

そして、親の仕事を見ていると、つらそうでいやになる。といった理由は、現在の農業のあり方を痛切に批判した、後継者の切実な心情のあらわれでは、ないでしょうか。

農業の価値感を向上させるとともに、農業の負を変化させ、向上させることは、問題解決の重要な決め手のひとつではないでしょうか。

⑧ 理想農業をかたちづくろう!!



★ さて、これまで、後継者自身の目を通し、"何故、後継者不足が起こるのか"その原因を、いろいろな角度から探ってきました。

若者たちの農業活動は、大人たちにとって、少々厳しいものであったかもしれません。しかしまた、若者たちは、若者たちなりに、農業の将来を考えているのです。

ここで、若者たちのこれまでの活動をまとめてみました。農業が抱えているひとつひとつの悩みを解決すること、それは、ひとつの具体的な理想農業をかたちづくるに他なりません。つまり、理想農業を築き上げて行くことが、後継者問題を解決する、最良の手段ということなのです。

"そんなに甘いもんじゃあない"などといわず、理想農業の構想を、じっくりと考えこみて下さい。

うになった。経営の一部を任せてくれたので、欲も出たし勉強もする。今は、農業を継いで本当に良かったと思っている」

さてこれまでは、個々の経営内部での問題点について述べてきた。しかし、これだけで問題が解決するはずは、もちろんない。穿った見方をすれば、これ等の問題は、ごく二次的な問題なのだ。

最も重要な問題、それは都市農業が直面している危機そのものである。一言でいえば、「農業で食っていけるか」「農業は生き延びることができるか」という問題なのである。それほどに、農業を続ける上での阻害要因は大きく、農業を不安定そのものにしているのである。

親自身が、また後継者が共通に持つ悩み、それは「農業で果たしてやっていけるのか」ということに他ならず、また、将来にわたって、絶対に安定しているとは断定できないのが現実なのである。

例えば、ここ数年来都市農業確立の大きな阻害要因となってきた宅地並み課税についてみよう。周知のように現在それは有名無実に等しいものと化しているが、宅地並み課税が、いかにこの後継者問題をむしばんだかということは、筆舌に尽くし難いものがある。

幸いにして、この大きな懸案事項が解決したとはいえ、それは問題の一部分が解決しただけでしかない。問題は、あまた山積しているのである。

結論的に述べると、農業後継者問題の解決は、農業問題の解決であり、また個々の経営の問題解決であり、それらを全て総合した問題解決に他ならない。即ち後継者を育成するための環境づくりということだが、それは奇しくも、農業の確立要件と一致していく。

後継者が順調に育っている地域がある。それ等の地域の共通項を挙げると

① 農専地区指定により、生産基盤が安定している。

② 仲間づくりが順調に行われている。

といったことがまずもって挙げられる。

これは、政策的に、また地域的に、いかに農業環境を整備することが大切かを物語るよい事例といえるだろう。

そして、こういった地区からは

「そんなに後継者後継者と騒ぐなよ。おれたちが、こうしてちゃんと頑張っているじゃないか」という声が聞えてきそうな気配すらする。

後継者はいるのか。「断じている。そして、それをそだてていくのは、社会の責任である」と断言して、結論としたい。〈横浜南農業協同組合経済センター組織生活課〉